暮らしについて考える小さな新聞

とちといえ

第4号

2026年10月16日発行

私が選んだ街｜新町松原

語り手｜長澤直子
株式会社ろっけん不動産 代表／一級建築士・宅建士



住む場所、働く場所、どう選ぶ？

人の数だけ、答えがある。家や土地を探していると、つい「正解の街」がどこかにあるような気がしてきます。でも、何を大切にするのか。何なら諦められるのか。どんな場所を心地よいと思うのか。その答えは、きっと人によって違います。「私が選んだ街」は、実際にその場所を選んだ人に、どうしてそこを選んだのかを聞くシリーズです。最初に話すのは、ろっけん不動産自身のこと。ろっけん不動産は、どうして新町松原で仕事をすることになったのか。新町通松原下ル。大きくいえば、烏丸五条界隈です。振り返ってみると、それは「新町松原に事務所を構えたい」と思って始まった話ではありませんでした。

寺町を、離れたくなかった。

前の事務所は、寺町夷川にありました。そこで5年間、仕事をしました。私は寺町が本当に好きでした。長くいるうちに近所の知り合いも増えて、困ったときには助け合える人たちができました。事務所も、ただ仕事をするだけの場所ではありませんでした。シェアカフェとシェアオフィスが一緒になっていて、毎日いろいろな人が出入りしていました。だから、移転することになったのは、寺町が嫌になったからではありません。きっかけは、家賃の値上げでした。もし値上げがなければ、そのままずっと寺町にいたかもしれません。それくらい、離れるのが辛い場所でした。

最初は、寺町の近くを探していた。

移転先を探し始めたとき、当然のように寺町の近くを見ていました。普通の賃貸事務所にするか。マンションやアパートの一室を借りるか。それとも、またシェアオフィスにするか。いろいろな場所を見ました。条件だけを考えれば、部屋を一つ借りれば済む話だったのかもしれません。でも、マンションの一室で一人、仕事をしている自分の姿を想像してみても、どうもしっくりこない。無味乾燥としていて、あまりワクワクしません。いくつかの場所を見るうちに、少しずつ気づき始めました。私が探していたのは、単なる「事務所」ではなかったのだと思います。

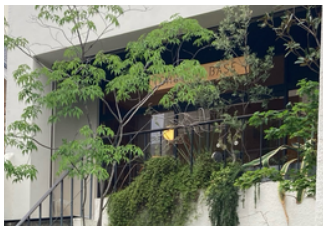
人と人との交流がある場所で働きたい。前の寺町の事務所には、いつも人の出入りがありました。話をする。助けてもらう。こちらが誰かを手伝う。そうやって仕事の周りに、人との関係がありました。移転先を探しているうちに、人と人との交流を大切にしている場所に、身を置きたいと思うようになりました。最初から掲げていた条件ではありません。探している途中で、自分が本当に大事にしていたものが分かってきたのだと思います。

素敵な場所に出会った。

次の事務所をどこにするか、探すうちに、GROVING BASEというシェアオフィスを見つけました。実際に足を運んでみると、シェアオフィス全体の雰囲気もよかった。特に印象に残ったのが、その場所の考え方でし

た。「子連れでも仕事をしに来られる場所」靴を脱いで仕事ができる絨毯敷きの小上がりがあり、子どもが遊べるスペースがあり、授乳室も用意されていました。そういう場所を後から付け足したのではなく、最初から「そういう人もここで働けるように」と考えてつくられている。そのことに、とても好感を持ちました。さらに、内見してびっくり。知り合いの設計事務所もこのシェアオフィスに拠点を構えていました。ここなら、人と人との関係の中で仕事ができるかもしれない。自然と、そう思っていました。





新町松原は、よく知らない場所だった。

だからといって、この場所に憧れていたわけではありません。烏丸五条界隈も、当時の私にとっては、ほとんど知らない場所でした。寺町を離れがたい気持ちもありました。少し大げさですが、「都落ちする」くらいの気持ちでした。それでも、いい場所に出会えたのだから、行ってみよう。新町松原を選んだというより、先に人や場所との出会いがあって、その場所がたまたま新町松原だった。そんな順番でした。移転して最初に感じたのは、とにかく人が多いことでした。子連れのママさん。学生さん。お年寄り。働く人。観光客。道に出ると、ほとんど必ず誰かがいる。歩いている人がいて、仕事をしている人がいて、自転車が通り、車も通る。なんだか、とてもせわしない。寺町にいたころは、感じたことのない街の雰囲気でした。でも、新町松原の周辺を毎日歩くようになって、別のことにも気づきました。京都の街中では、車道と歩道がきれいに分かれている道の方が、むしろ少ない。細い道を、人も、自転車も、車も使う。お互いに少しずつ気をつけながら進んでいる。それもまた、京都の街中の日常なのだと思うようになりました。

街を好きになったきっかけは祇園祭だった。

新町松原へ移ってきて、街への見方が大きく変わった出来事があります。祇園祭です。7月に入ると、急に街が華やかになって、一日、また一日と、街の様子が変わっていきました。昨日まで何も無かった道路にテントが立ち、うんざりするような暑さの中で、鉾町の人たちが一生懸命に鉾を組み立てている。それぞれに役割があって、いろいろな人が祭りを作り上げていました。「これを毎年、この街の人たちがやっているんだ。ここは、そういう街なんだ」そう思ったことを覚えています。毎日、毎朝、昨日とは違う街を見られることが、嬉しかった。事務所は鉾町の真ん中にあるわけではありません。松原通から少し南へ下がり、五条通にも近い。鉾町のすぐそばにいながら、少し外れている。その微妙な距離感も、今ではこの場所らしいと思っています。

選んだもの／手放したもの

振り返ってみると、事務所を探し始めたころに考えていたことと、実際の決め手はずいぶん違っていました。手放したのは、寺町という慣れ親しんだ場所と、これまで築いてきた近所との関係、「寺町を離れたくない」という気持ち。これらを手放して選んだのは、人との交流が生まれる環境、人とのご縁、いろいろな人が働けるように考えられた場所、そこで働いている自分を少し楽しみに思える予感のようなものでした。新町松原そのものを選んだつもりはありません。でも、様々な選択と決断の先に新町松原がありました。

もう一度選ぶなら、新町松原？

そう聞かれると、少し困ります。寺町が嫌になって離れたわけではないからです。家賃が上がらなかったら、今でも寺町にいたと思います。正直に言えば、今でも機会があれば寺町に戻りたいと思うことがあります。だから、「新町松原が一番だった」とは思っていません。場所を選ぶというのは、そんなに単純ではないのだと感じました。きっかけがあって。偶然があって。縁がある。そして、その場所で過ごしているうちに、新たな気づきや自分自身の変化、人との出会いが積み重なって、街の印象も変わっていくのだと思います。とは言いつつも、最初に感じた、せわしない街という印象は、変わっていません。でも今は、そのせわしなさを心地よく受け入れている自分がいます。私自身も、この街で働く人間の一人だと思えるようになったからなのかもしれませんね。

この人は、こう選んだ。

寺町を離れたくない気持ちを抱えながら、人との関係が生まれる環境を選んだ。

最初から街を決めず、実際に場所を見ながら、自分が大切にしたいことに気づいた。

「一番いい街」ではなく、ここで働く自分を少し楽しみに思える場所を選んだ。

発行｜ろっけん不動産　京都で、住む場所を一緒に考える不動産屋です。
京都市下京区新町通松原下ル富永町107-1 GROVING BASE